

滑稽な人物 Dogberry

西 野 義 彰

1

1598年の後半に Shakespeare によって書かれた喜劇 *Much Ado About Nothing* には、Dogberry という愉快な人物が登場し、言葉の滑稽な誤用やとんちんかんな会話などで観客の笑いを誘う。彼は明らかに道化（愚者）の部類に入る。彼は *As You Like It* の Touchstone や *Twelfth Night* の Feste のような、賢明で利口な職業道化ではなく、頭の回転が悪いにも拘らずいろんな事を言おうとして言葉の誤用をしばしばしてかす。当然ながら Dogberry は脇役の一人として登場し、台詞の量や登場回数もかなり少ない。しかし、彼はこの喜劇において欠くことができないほど貴重で魅力的な人物である。具体的な分析に入る前に、彼が登場するこの喜劇についてある程度見ておく必要がある。

この喜劇はイタリアのメシーナが舞台になり、アラゴンの領主 Don Pedro が異母弟 Don John との戦いに勝ち、後者と和解してフローレンスの Claudio やパデュアの若い貴族 Benedick らを伴って帰還し、メシーナの知事 Leonato の歓迎を受けるところから始まる。Claudio は Leonato の娘 Hero に一目惚れし、両者を中心とする愛の物語が一つのプロットを構成する。一方、Benedick と Leonato の姪 Beatrice は二人ともプライドが高く心の内では互いに意識しながらも、相手に対する嫌悪感をあからさまに表明し、生涯独身を貫くことを宣言するとともに、出会うたびに機知に富んだ痛烈な皮肉や悪口を浴びせる。これら二人がもう一つのプロットを構成し、二つのプロットが密接に絡まりながら展開してゆく明くて楽しい劇である。とはいえ、まったく不安や陰りのない喜劇ではなく、Iago の前身ともいえる Don John¹⁾ と手下の悪巧みによって主人公 Claudio と Hero の愛と結婚が一時危機的状況に追いやられるという点で、波乱の要素を含んだ劇である。Shakespeare はこの劇の少し前に *A Midsummer Night's Dream* や *The Merchant of Venice* を書いており、この劇の直後に *As You Like It* や *Twelfth Night* という有名な喜劇を書くことになるのだが、これらの作品に共通するものは主人公を中心とする男女間の愛と結婚である。また、この頃の作者は、A.R.Humphreys が述べるように、悲劇的な可能性が存在するときは常に、喜劇

においてもそれを劇的に強めること（dramatic intensification）²⁾に関心を持っており、各々の劇では主人公たちが異なる状況において固有の問題や試練に直面して一時的に危うい状況に追い込まれるが、なんとかそれらを克服して彼らの愛が成就し幸福な結婚に至る。当面の喜劇についても、上述の喜劇的パターンと中心的な関心という点では共通性を有している。

Claudio-Hero、Benedick-Beatrice それぞれのプロットを書くにあたって作者が利用した材料に関しては、アーデン版テキストのイントロダクション等で詳しく考察されているのでここでは立ち入らないことにして、劇場での経験とは別に、この劇を一読した後には受ける印象は、Benedick と Beatrice がひととき強い輝きを放っていること、彼らは自尊心が高く、聡明で個性豊かな存在であり、彼らが話す台詞が見事なまでに相手をこき下ろす皮肉、毒舌や機知に富んでいることである。このプロットの見所は、彼らが周囲の者が仕組んだ罠にいと簡単にかかり、たちまち互いに愛を抱き始め、劇の結末では Benedick が心変わりに対するもっともらしい口実を述べて、Hero らとともに結婚式に加わるという大きな変化である。彼らに比べると、Claudio や Hero は性格造形においても掘り下げが乏しく、個性の点でも強く印象づけるものはあまり見られない。二人とも状況の変化に対して自ら積極的に判断を下していろいろな局面に対処するよりも、他者に支援を求める消極的な部分を持っている。Claudio については 2 幕 1 場において、Don Pedro が恋人の Hero を横取りしたようだという根拠のない話に簡単に動揺するとか、5 幕において Hero が無実の罪をきせられ後で純真無垢だとわかった時、彼女の父親の要求を即座に受け入れるなど、主人公の行動としてはやや物足りなさを感じさせる。従来、この劇の批評において Benedick-Beatrice のプロットについて多くの議論がなされてきたといわれるが、彼らの生氣、活力、機知、見事なまでの痛快な毒舌、「立ち聞き」以後にみせる心変わりや滑稽さなどを考えると頷ける。

この劇の舞台となるメシーナには「休日の雰囲気」³⁾が支配し、Don John を除いて劇全体は、主に余暇を利用して互いに交流を楽しむ上流階級の会話から成りたっている。⁴⁾ そのような社会の中で Dogberry たちは、彼らなりの位置をはっきりと占めていて、劇世界に貴重な幅を与えている。この劇の大きな特徴の一つに「立ち聞き」という仕掛けがある。1 幕 2 場で Leonato は兄弟の Antonio から従者の立ち聞きの話（事実と異なる）として、Don Pedro が今晚の舞踏会で Hero に求愛するらしいという話を聞く。すぐ後の 3 場では Don John のもと

に従者の Borachio が駆け付け、立ち聞きによって Don Pedro が Claudio のために Hero に求愛するらしいということを報告する。Don John はそれを妨害し、心に鬱積している憤りを晴らすための絶好の機会と考え計画を練る。2幕3場では、犬猿の仲の Benedick と Beatrice を結婚させるために Don Pedro たちは立ち聞きという方法を利用し、互いに対する死ぬほどの切ない想い(作り話)を聞かせることで二人をその気にさせる。他方、3幕3場では Dogberry の指示を受けた夜番たちが、Don John の悪巧みについて酒によった Borachio が仲間へ洩らすのを偶然立ち聞きし彼らを逮捕する。Dogberry たちの頭の鈍さゆえに関係者への連絡が遅れるが、最終的に悪党の逮捕が関係者に真実を知らせることになり、破談という危機を未然に防ぐことができる。このように「立ち聞き」は、それぞれのプロットにおいて事態を進展させたり悪巧みに利用されたりして、すべてが密接に絡みながら喜劇的な結末へと導く重要な仕掛けとなっている。

Shakespeare にとって常に大きなテーマの一つであった外見と実体のずれは、この劇においても取り上げられている。Kenneth Muir が指摘しているように、⁵⁾この劇には *Macbeth* と同様、衣類のイメージがしばしば用いられ、それらが重要なイメージになっている。衣類は外見と実体のずれを表すシンボルとして用いられ、それらは偽善やみせかけと結びつく。人間や事物は見かけどおりとは限らず、その下に潜む真実を見抜くことは容易ではない。Claudio が Hero の純真さや貞節を信じきれず、教会での場面で彼女を痛烈に非難し拒絶した時、彼は未熟さと嫉妬のために彼女の本質を見抜けなかった。Don John は自分を“villain” (1.3.30) と呼んでおり、これは「動機なき悪意の真の例」⁶⁾といえるが、悪の化身 Iago と同様、周囲の者はうわべの下に隠された悪党としての本質を見抜けなかったために、Hero が一時危うい状況に追い込まれる。このように劇中の多くの人物がなんらかの形で、外見と実体のずれから生じる問題に翻弄される。Ralph Berry の調査によると、この劇で最も頻繁に使われている重要な語は“love”であり、次に多用されている語は“knowest”などすべての形を含めて“to know” (84回) であるということである。それは他の劇と比べてもかなり多い数であるという。⁷⁾ この点からすると、愛と結婚が主題となるこの劇において、恋人たちや他の人物が互いをよく知ること、外見の下に隠れた実体を見極めることに大きな関心を持っていると言うことができる。

別な主題として、男性社会における女性の立場、ジェンダー及び世代間の戦いというのが挙げられるかもしれない。社会のあり方が男性及び父親の価値観によ

って決定されると、女性はそのような社会においてほとんど抵抗できず、それを受け入れる他ない。Hero は最終的に誤解が解けて Claudio とめでたく結婚するが、彼女はそのような男性社会における女性の弱い立場を物静かで控えめな態度を通して暗示しているように思われる。それに比べて Beatrice は、Hero とは対照的に自立心が旺盛でプライドが高く利発な女性であり、異性や男性社会に毅然と臨み、生涯独身を公言するほどの個性的で近代的な女性である。結末では彼女も Benedick との結婚に踏み切るが、そのことは男性中心の社会に対する彼女なりの批判を完全にやめることを意味しない。

Shakespeare は喜劇時代に無韻詩よりも散文を重視し、劇にかなり取り入れるようになる。直前に書かれた *Henry IV, Part 1&2* において散文の比率が急激に高くなり、当面の喜劇では散文が無韻詩の約3.3倍用いられている。⁸⁾ Claudio-Hero のプロットは主に韻文で書かれているが、Benedick-Beatrice のそれは主に散文で書かれていて、作者は明らかに文体を使い分けている。Kenneth Muir は、16世紀末にかけて Shakespeare は、役者たちの増大する巧みさが口語的話し言葉により近い文体を要求したと考えたかもしれないと推測している。⁹⁾ Shakespeare の無韻詩は、しだいにより自由で自然なりズムをもったものに進化したといわれるが、散文も John Lyly の大きな影響をうけた初期の、固くわざとらしいものからよりすぐれた自然なものへ発展していく。この頃の作者は口語的話し言葉により近い散文の可能性を追求し、新たな試みによって人間の本质や社会の実相により鋭く迫ろうとしたと言えるかもしれない。

2

Dogberry が初めて登場するのは3幕3場である。その時点までに Claudio は Hero に一目惚れし、周囲のはからいで結婚の日取りが決まり、Leonato 邸ではその準備が進められている。他方、互いを意識しながらも犬猿の仲にある Benedick と Beatrice についても、立ち聞きという罠にかかり相互に恋心を抱き始めている。直前の3幕2場では、悪党の Don John が結婚式の前夜に、Claudio と Don Pedro に対して Hero が不貞であることの決定的な証拠を見せると約束し、Claudio たちは怒りと決意をもってそれに臨むことになる。滑稽で頼りないが法と秩序を守ることを本務とする Dogberry たちは、劇の雰囲気や暗から明に転換する意味でも絶好のタイミングで登場するのである。¹⁰⁾ 彼らは観客を笑いとユー

モアの世界へ誘うだけでなく、真に悲劇的なことが恐らく生じないだろうという期待とともに一種の安心感を提供する。Dogberry は警吏として、他に村役人の Verges、2人の夜番が登場する。この劇において彼らは脇役でありながら重要な役割を演じるので、第3のプロットを構成するということもできる。Dogberry はメシーナの治安に係わり犯罪を取り締まる立場にあるのだが、その重要性に対する自覚はやや乏しく、頭の回転も決して良いとはいえない。夜番に今夜の指示を出してほしいと言われて、まず責任者を決めるために彼は「夜番の長たるに最もふさわしくない (desertless) 者は誰か」と尋ねる。彼としては「ふさわしい」のつもりで “desertless” を用いたが、これは滑稽な言葉の誤用 (malapropism) であり、意図とは逆の意味になっている。彼の場合、言葉の誤用は普通のことであり、珍妙な言葉遣いとともに彼の滑稽さの特徴になっている。彼は読み書きができる Seacoal を責任者に決め、次のように語りかける。

...You are thought here to be the most senseless and fit man for the constable of the watch; therefore bear you the lantern. This is your charge: you shall comprehend all vagrom men; you are to bid any man stand, in the Prince's name. (22-26)¹¹⁾

Dogberry は相手をほめるつもりで「もっとも分別に欠けたふさわしい者」と言い、任務についてはすべての浮浪者 (“vagrom” は “vagabond” のつもり) を想像すべし (“comprehend” は “apprehend” (逮捕する) のつもり) と言っている。怪しい者に止まれと言っても立ち止まらない場合どうすればよいのか聞かれると、彼は「そんな奴には構うことなく行かせればよい。そしてすぐに他の夜番を呼び集め、悪人がいなくなったことを神に感謝せよ」と言ってのける。また、泥棒らしき者を見つけた時は手出しをしたり係わらない方が、それだけ諸君の身の潔白を保証することになると言う。夜番から泥棒を見つけても逮捕しないのかと聞かれると、彼は「汚れたものに触れると手が汚れる」という諺を引用して、間違っただけ泥棒を捕まえてしまった時、最も穏便な方法は彼の本領を發揮させて逃げるがままにすることだ、と述べる。¹²⁾ 現在、世間では、彼は “a merciful man” (慈悲深い人) として定評があるようである。万事このような調子で、彼は最後に明日の婚礼の準備で今夜は大騒ぎになるので、Leonato 邸を見張るよう伝えて立ち去る。まもなく、そこに Don John の手下が現われ、酒によった

Borachio が Hero の不貞をでっちあげ、その謝礼として大金を受け取ったという秘密を洩らしてしまう。それを立ち聞きしていた夜番たちは、直感的に彼らを逮捕する。この出来事が後ですべてを喜劇的な結末へ導くことになり、非常に重要な意味をもつのである。

Dogberry と Verges は悪党の逮捕を受けて、さっそくこの件について Leonato に報告する。我々の期待通り、ここでも Dogberry は滑稽な言葉の誤用を繰り返し、なかなか肝心の用件に入らないので、多忙の Leonato が話を切り上げようとする、Dogberry はやっと本題に入って次のように言う。

One word, sir: our watch, sir, have indeed comprehended two aspicious persons, and we would have them this morning examined before your worship. (3.5.43-45)

これに対して Leonato が、現在忙しくて尋問はまかせるので、その結果を後で提出するように指示すると、彼は “It shall be suffigance.” と返事をする。ここでは “comprehended” は “apprehended”, “aspicious” は “suspicious”, “suffigance” は “sufficient” の誤りで、共通するのはこれらがやや長くて難しそうな単語という点にある。これらはほんの一例にすぎないが、Dogberry 本人としては法的、役人的な言葉を含めているいろいろな表現や諺に大きな関心を持ち、自分の教養に対して絶大な自信をもって行動している。

4 幕 1 場は Claudio による Hero 拒絶の場面から始まり、この喜劇において最も悲劇的な様相を呈する。その直前で Dogberry たちが、悪党の逮捕と結婚の妨害に関する重要な知らせをもって Leonato に会いに来たが、彼らの要領の悪さと冗舌により伝えることができなかった。そのため観客はしばし重苦しい光景を見ることになる。ただし、彼らは Borachio たちが既に逮捕されていることを知っており、いずれ事態が好転し喜劇的結末を迎えるという期待と安心感をもって観ていることは間違いない。4 幕 2 場は Dogberry たちが再び登場し、悪党たちを例の調子で取り調べる愉快な場面となる。ここでは書記として登場する Sexton が最も信頼できる人物で、もし彼がこの場にいなければまともな尋問や調査作成もできなかったであろう。Dogberry はさっそく Borachio たちに滑稽な尋問を始めるが、すぐに書記から尋問らしくするために告発者である夜番を呼ぶよう促される。夜番とのやり取りで Dogberry は、“flat perjury” (完全なる偽証罪)

や“flat burglary”（完全なる強盗罪）などの法律用語に言及する。彼の場合、誤解と教養の無さからくる言葉の間違いは大きく分けると2種類あり、本来の言葉と綴りがわずかに違うために別な言葉になってしまうものと、意図した言葉とはまったく異なるか正反対のものになるというものである。上に挙げた用語は Borachio の罪とは大きくずれており、そのギャップから笑いとおかしみが生れる。夜番の証言を聞いた Dogberry は、

O villain! Thou wilt be condemned into everlasting redemption for this. (4.2.53-54)

と叫ぶ。ここでの“redemption”（救い）は明らかに「苦しみ、罰」のつもりで使われていて、内容的には Borachio が「永劫不滅の救い」という罰を受けることになり、彼の意図とは逆のことを意味し観客としては笑いを禁じえない。書記が退場した後、悪党を Leonato のもとへ連行しようとした時、彼らは Dogberry を馬鹿呼ばわりする。それに憤慨した彼は次のように言う。

Dost thou not suspect my place? Dost thou not suspect my years? O that he were here to write me down an ass! But masters, remember that I am an ass: though it be not written down, yet forget not that I am an ass. ... I am a wise fellow, and which is more, an officer, and which is more, a householder, and which is more, as pretty a piece of flesh as any is in Messina, and one that knows the law, go to, and a rich fellow enough, go to, and a fellow that hath had losses, and one that hath two gowns, and everything handsome about him. Bring him away! O that I had been writ down an ass! (71-84)

彼が2度繰り返している“suspect”は“respect”のつもりである。台詞全体では、年配で役人である彼が悪党に侮辱され、プライドと全存在を賭けて反撃しているところである。彼は調書に自分が馬鹿だと書き留めることに強くこだわり、その旨の表現を繰り返す。調書の言葉や内容が、罪人を裁く際に決定的な重みを持つということなのか。彼は自分が社会的にも、経済的にも、人生経験の点からいっても尊敬に値する人物であることを、“a wise fellow”や“an officer”など

の表現を用いて強調しているが、個人の具体的な事柄に言及すればするほど、皮肉なことに、彼は自分の愚かさや浅はかさを一層露呈してしまう。端的に言えば、この台詞全体が彼が愚か者であることを物語っている。従って、一瞬ではあるが、ここには滑稽さを通り越して一種の哀切さが漂っているといえる。しかし、不思議なことに、我々から見て彼の言葉や振る舞いがいかに滑稽で馬鹿げているようにも、彼はいつも自分の正しさを確信している。また、彼は自分の言語能力や社会一般の教養についても自信をもっていて、頭の鈍さや要領の悪さなどには全く気付いていないようである。

5幕1場は Leonato が父親としての悲しみと怒りを吐露し、兄弟の Antonio と名誉を回復するため Claudio に決闘を挑むという緊張した場面から始まる。しかし、まもなく Dogberry たちが悪党を連れて登場し、Don Pedro と Claudio は予期しなかった事実を知らされる。皮肉なことに、Borachio の言葉を借りると、利口な者に分からなかったことを “these shallow fools” (これらの馬鹿者たち) が暴露したのである。この場面でも Dogberry は彼らしい言葉の誤用や珍妙な表現を繰り返し、尋ねられたことにも要点をはずしながら要領の悪い説明をする。Don Pedro はあきれて、“This learned constable is too cunning to be understood.” (222-23) と言わざるを得ない。本人としては話すことすべてが理路整然としていて明快なのである。Leonato が彼に礼を述べて囚人を引き渡すように言うと、彼は誠に彼らしい返事をして立ち去る。

I leave an arrant knave with your worship, which I beseech your worship to correct yourself, for the example of others. God keep your worship! I wish your worship well. God restore you to health! I humbly give you leave to depart, and if a merry meeting may be wished, God prohibit it! Come, neighbour. (315-21)

自分の仕事がそつなくやれたという満足感からか、それとも相手が身分の高い人物であることを強く意識してか、彼は “worship” という言葉を何度も繰り返し、Leonato に対して非常に丁寧な言葉遣いをしている。また、意図的なのか偶然なのか断言しにくいのが、w 音と m 音のアリタレーションが所々に用いられ面白い音的効果が得られている。相手は健康そのものなのに “restore” を使って祈ったり、“give you leave” によって立ち去るときの表現が「失礼します」から「失

礼してよい」と逆転している。また、“prohibit”を用いたために「あなたとは2度と会いたくない」という意味になっている。Dogberry たちの重要な役割はここで終了し、偶然の立ち聞きにより始まり、ほとんどの人物を巻き込んで展開した空騒ぎは、2組の恋人たちの結婚という形で幸福な結末を迎える。

この喜劇が初演された当時、Shakespeare が所属していた宮内大臣一座には Will Kemp という有名な喜劇役者がいて、彼が Dogberry を演じたと言われていた。彼は即興の見事な台詞で舞台の人気をさらったといわれ、Dogberry 役においても与えられた台詞以外に、滑稽なアドリブを交え観客の笑いを誘ったことは十分考えられる。¹³⁾ それはそれとして、これまでの考察から Dogberry の特徴は次のようになるであろう。彼は自尊心が高く尊大で、比較的長くて難しい言葉や諺に強い関心を持ち、生半可な理解でそれらの言葉をためらいなく自信をもって使うために、しばしば滑稽な言葉の誤用や失敗をしでかし、周囲の笑いを誘う。彼はまじめであるが明らかに愚鈍な人物で、「自分に機知があるだけでなく、他者にも機知あらしめる」あの偉大な道化 Sir John Falstaff とは程遠い。当面の劇では、彼は鋭敏な知性と機知の持ち主である Benedick や Beatrice とは対極に位置する。しかし、彼は警吏として誇りをもって治安にあたり、市民に対して優しい思いやりを示す。普通の考え方からすれば、彼は道徳的に混乱していることは確かであるが、泥棒を見て見ぬふりをするよう奨励するのは完全な無責任からではなく、職務の遂行が日々平穩に行なわれることを第1に重視するからに他ならない。言葉と行動がいかに滑稽で馬鹿げても、彼としてはそれらが、常に自分の深い教養と豊かな経験に裏打ちされた最善のものであると確信している。彼は裏で賄賂をもらい私腹を肥やすような邪悪な人物ではなく、明らかに“a good-natured fellow”¹⁴⁾、つまり、人のいい人物なのである。彼の性格は非常に単純で、すべてが自己本位であり、役人としての社会的な立場に誇りをもっている。彼が時々用いる諺(的な表現)を見ると、“folk-wisdom”¹⁵⁾(世俗的な知識)も少なからずあるといえる。彼の言葉に対する理解と知識は浅くて雑なものであるが、しばしばやらかす滑稽な誤用には計画的に笑いを狙ったような、センスを感じさせる見事なものが多い。この点で、*A Midsummer Night's Dream* に登場する機織り職人の Bottom と共通するところが多い。意図とは正反対の意味の言葉を使うとか、ほんの一部が間違っているために実に滑稽で珍妙な表現になることが、まさに彼の特徴であると言えよう。我々は彼を malapropism の天才と呼ぶことはできる。しかし、彼の場合、幸か不幸か、それが自由自在に行なえ

るほど豊かな才能に恵まれていないのである。Shakespeare はすぐ後の喜劇で非常に機知に富む賢明な道化 Touchstone や Feste を創造するが、Dogberry はこれらとは全く異なる笑いの対象としての道化、我々が決して憎むことのできない愉快で滑稽な人物であると言うことができる。

(注)

- 1) 私生児で社会に対して不満や恨みを抱いている Don John は、劇のプロットを前進させるために重要な役割を担っている。
- 2) The Arden Shakespeare: *Much Ado About Nothing*, Methuen, 1981, Introduction, p.12.
- 3) John Wilders, ~*New Prefaces to~ Shakespeare*, Basil Blackwell, 1988, p. 144.
- 4) Harold Bloom(ed.), *Modern Critical Interpretations: William Shakespeare's Much Ado About Nothing*, Chelsea House Publishers, 1988, p.72.
- 5) Kenneth Muir, *Shakespeare's Comic Sequence*, 1979, p.68.
- 6) *Ibid.*, p.72.
- 7) Ralph Berry, *Shakespeare's Comedies: Explorations in Form*, Princeton University Press, 1972, p.155.
- 8) 福田恒存監修『シェイクスピア・ハンドブック』三省堂, 1987, p.244.ちなみに、このすぐ後に書かれた喜劇 *As You Like It* や *Twelfth Night* においても散文が多用され、その比率は無韻詩の2倍前後になっている。
- 9) Kenneth Muir, *op.cit.*, p.68.
- 10) Bente A. Videbæk, *The Stage Clown in Shakespeare's Theatre*, Greenwood Press, 1996, p.48.
- 11) The Arden Shakespeare: *Much Ado About Nothing*, *op.cit.* 以後作品からの引用はこの版による。
- 12) この辺りの Dogberry は「倫理的混乱」(ethical confusion) をきたしているといえる。Cf. Harold Bloom(ed.), *Modern Critical Interpretations: William Shakespeare's Much Ado About Nothing*, *op.cit.*, p.31.
- 13) The Arden Shakespeare: *Much Ado About Nothing*, *op.cit.*, p.23, footnote 5.
- 14) John Wilders, ~*New Prefaces to~ Shakespeare*, *op.cit.*, p.150.
- 15) *Ibid.*, p.151.